

広大な野外における会話時の身体の空間配置：
野沢温泉道祖神祭りの準備作業における事例から
**Spatial orientation of participants' bodies
in conversations conducted in the vast field:
A case study from Nozawa-onsen Dosojin festival**

伝 康晴

Yasuharu Den

千葉大学大学院人文科学研究院

Graduate School of Humanities, Chiba University

den@chiba-u.jp

Abstract

In this paper, we illustrate how participants in conversations conducted in the vast field spatially orient their bodies to conversants and physical objects depending on the environments and the contexts they are in. A micro analysis of the video data from our fieldwork at Nozawa-onsen Dosojin festival shows that participants develop various body orientations such as F-formation in a circular, side-by-side, and C-shaped arrangements as well as H-formation. We discuss what physical, interactional, and social factors affect the formation and the transformation of these body orientations.

Keywords — Body orientation, F-formation, Conversation, Fieldwork

1. はじめに

本研究では、広大な野外において会話する人びとの身体の空間配置が、物理的環境や相互行為的文脈に応じてさまざまに変容する過程を例示し、実世界における動的な会話活動の仕組みを理解する一助とする。

人びとが集まって会話するとき、各人は自己の身体を空間内にさまざまに配置する。Kendon (1990) は、個々人の操作領域（眼前の活動に従事する上で必要な自己の身体の前に広がる空間）が重なり合う **O** 空間を会話参加者が空間配置的に維持するものとして、**F** 陣形という概念を提案した。3人以上の人が立ち話をする場合、**F** 陣形は典型的には円形の空間配置として立ち現れる。

一方、McNeill (2006) は、**F** 陣形を社会的 **F** 陣形と道具的 **F** 陣形に細分した。前者は人びとが社会的インタラクションを行なう際に発話や身振りなどを表出する空間に基づくものであり、後者はインタラクションに利用する対象物を操作するための空間に基づくもの

である。McNeill は、Kendon の **F** 陣形は社会的 **F** 陣形に対応する一方、道具的 **F** 陣形においては **O** 空間が対象物の存在によって変形されるとした。坊農・鈴木・片桐 (2004) は、ポスター発表場面を取り上げ、参加者たちの志向性によって社会的 **F** 陣形から道具的 **F** 陣形に遷移する様子を描いている。また、牧野・古山・坊農 (2015) は、展示物解説場面を取り上げ、科学コミュニケーターが他の参加者と異なる位置に立つ **H** 陣形が語りの環境構築の資源として利用されていることを示している。

これらの先行研究が、ポスター発表や展示物解説など、参加者たちの比較的近くに対象物がある場面を扱っているのに対して、筆者のフィールド (榎本・伝, 2015) である野沢温泉道祖神祭りの準備作業場面では、40メートル四方以上もの広大な野外において、ときには何十メートルも離れた対象物を参照しながら会話が行なわれる。このような場面では、活動の内容（対象物を介した教示か雑談かなど）や対象物との距離に応じて陣形がさまざまに変容していく。本研究では、これらを事例分析を通じて例示し、陣形の形成・変容に関わる物理的・相互行為的・社会的要因を検討する。

2. データ

2.1 概略

長野県下高井郡野沢温泉村で毎年1月15日に行なわれる道祖神祭りの準備場面を複数の調査者の手持ちカメラによって撮影した映像。2012年度から継続して調査しており、総収録時間は1000時間に及ぶ。

本研究で対象とするのは、道祖神場と呼ばれる40メートル四方以上もの祭り会場の設営場面において、社殿棟梁を中心とする数名の参加者によって適宜場所を変えながら行なわれた複数の会話である。

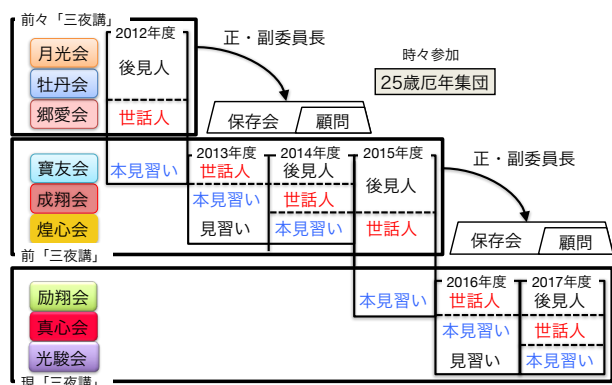


図1 「三夜講」 模式図

2.2 収録日・時間

2017年1月12日午前10時ごろから30分程度

2.3 参与者・場面

道祖神祭りの準備作業および本番は、「三夜講」と呼ばれる、数え42歳につらなる3学年からなる集団によって執り行なわれる(図1参照)。三夜講内では、毎年、42歳30名弱の集団が祭りの中心の執行を担う「世話人」となり、それより年下の集団は「見習い」として世話人を手伝う。とくに、世話人のすぐ下の学年は「本見習い」として、前年6月から始まる準備作業の一切を世話人とともにこなす。たとえば、2017年1月(2016年度)に行なわれた祭りでは、「励翔会」が世話人、「真心会」が本見習いであった。世話人の代表は、「道祖神委員長」という役職につき、三夜講が携わる現場の作業の総指揮をとる。

3年をサイクルとして三夜講は次の世代に引き継がれ、退役した三夜講の各学年の道祖神委員長・副委員長の計6名は、「保存会」として次の代の三夜講の後見する。保存会の最年長組の委員長は、「社殿棟梁」という役職につき、祭り会場や社殿の造営に関わる立案と指揮の最高責任者となる。2016年度の祭りでは、前年に退役した「寶友会」の元委員長が社殿棟梁としてはじめて指揮をとった。この社殿棟梁は、一昨年度・昨年度に、前の代の社殿棟梁(「月光会」の元委員長)から見習いとして職務内容を学んでいる。

本研究で分析対象とする場面の主たる参与者は、2016年度時点の現社殿棟梁(現棟; 寶友会)・前社殿棟梁(前棟; 月光会)・現道祖神委員長(現長; 励翔会)・次期道祖神委員長(次長; 真心会)の4名である。祭り当日、会場は雪に覆われるが、その数日前から、雪不足を補うために村内各所から道祖神場に雪を搬送

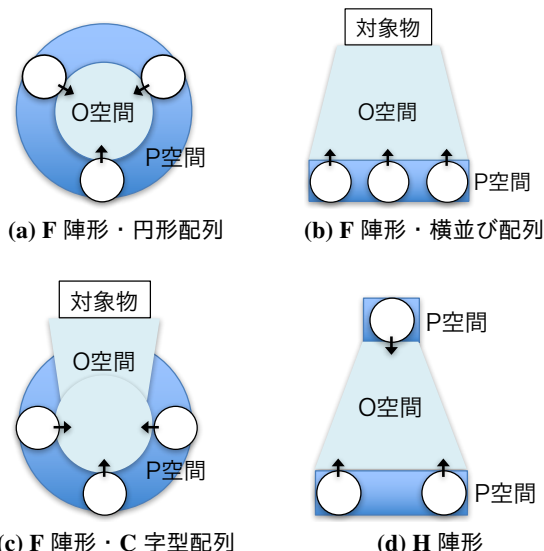


図2 陣形の模式図(参与者3人の場合)

し、重機で整地する作業を行なっている。現棟は、現長に祭り会場の設営に関する指示を与えるために、この場にいる。次長は現長の見習いとして常時現長と行動をとらしている。そこに、新米の現棟に助言を与えるために、前棟が道祖神場に様子を見に現れたところである。前棟は、祭り会場全体の雪面の高さや、祭りの主役たる社殿の設営位置などに関して、助言を与える。この他、これらの集団が作業に携わる人々と会話することもある。

3. 事例分析

3.1 概要

本研究で注目する場面では、前棟が道祖神場を歩き回りつつ、適宜立ち止まり、現棟らに整地に関する助言を与えるために会話を開始する。他の3人は前棟に追従しつつ、会話のたびになんらかの陣形を形成する。30分間に図2のようないくつかの典型的な陣形が見られた。

- (a) **F 陣形・円形配列**: 日常の立ち話などで典型的に見られる陣形で、参与者たちがお互いに身体を向け合い、O空間を取り囲むP空間上に各自の身体を円形に配列した陣形
- (b) **F 陣形・横並び配列**: 遠方の対象物を参照しながら会話するような状況で現れる陣形で、すべての参与者が対象物の方向に身体を向けて、各自の身体を横並びに配列した陣形。ただし、全員で1列になるのではなく、2列以上になることもある。
- (c) **F 陣形・C字型配列**: 円形配列と横並び配列の折衷的な陣形で、円形配列のP空間のうち対象物の



図3 事例1の陣形

ある方向を広く開け、参加者たちがお互いに身体を向け合いつつ、対象物の方向にも身体を向けられるようにC字型に身体を配列した陣形

- (d) **H 陣形**：特定の参加者が特権的な位置に立つ陣形で、他の参加者は横並び配列などを取り、特権的な参加者と対峙するように身体を配列した陣形。特権的な参加者が語りを開始するなどの際に利用される陣形と言われる(牧野他, 2015)。

以下、具体的な事例を見ていこう。

3.2 事例1：F 陣形・円形配列

事例1の陣形の移り変わりを図3に示す。主たる4人が道祖神場に現れる場面である。この十数分前に現棟が道祖神場に現れるが、現長がいなかったため、道祖神場に隣接する詰所にいったん戻り、十数分後、前棟・現長・次長とともに道祖神場に再び姿を現す。

前棟を先頭に道祖神場の奥まで歩いていくが、そこで前棟は、祭り会場造営の手伝いに来ていた前三夜講の運搬係(元運;成翔会)を見かけ、声を掛ける(図3 i)。それをきっかけに、前棟と元運の間で会話が始まるが(図3 ii)、現棟はこの2人の脇を回り込むように前に出て、造営の具合を眺める(図3 iii)。このとき、前棟と元運も前方を眺めており、全員が仕事モードに

ある。しかし、直後に前棟が何かつぶやき(重機の騒音のため聞き取れない)、元運は顔を覗き込むや大声で笑い出す。同時に、現棟が2人のほうを振り返って笑い、現長と次長の2人も笑う。これをきっかけに会話は雑談に移行する(図3 iv)。雑談が行なわれている間、前棟・現棟・元運の3人はお互いに身体を向け合い、円形配列のF陣形を構成している(図3 v)。円形配列の内側にあるO空間は発話や身振りなどを表出する場として用いられている。

現長と次長の2人は、このF陣形の外側に立っていることに注意しよう。現棟と元運は同じ前三夜講のメンバーであり、前棟も当時の社殿棟梁として彼らと3年間活動をともにしていた。一方、現長と次長にとっては、現棟は社殿棟梁として指示を受ける関係にあるが、他の2人とは直接つながりが無い。そこで、このF陣形に加わらず脇に控えていることが、この社会においてはふさわしい行動とみなされているようである。F陣形とその外側という対比が生まれることで、現長・次長の会話への参与は、笑いや頷きなど限定的となる。主体的に発話順番を取ることはなく、承認された受け手というよりも、会話を側で聞いている側聞者(bystander)(Goffman, 1981)の立場にある。

3.3 事例2：F 陣形・横並び配列

事例2の転記¹と陣形の移り変わりをそれぞれ図4・5に示す。前棟・現棟が横並びで祭り会場の雪面の高さについて相談している(図5 i)。2人の前方には十数メートルに渡って雪面が広がっており、それを参照しての会話である。現長と次長は一步下がったところで横並びで立っている。ここでもやはり、この2人は側聞者の立ち位置にいる。前棟は「これでまた:(0.1)十四日から雪降ると(もう)かなり(雪面が高くなる)」と現棟に話しかけ(01行)、現棟は前棟と視線を合わせると、「そうですね:」と答える(03行)。

ここで現棟は、視線を前方に戻すと(04行)、右手で前方を指しながら、「(あん玲)(0.3)(あれ見)」(「玲」は現長の名前(仮名))と現長に話しかける(05行)。話しかけながら、現棟は一步下がって現長に体を寄せる。現長は一瞬ちらっと現棟を見た後、前方に視線を戻し、現棟が体を寄せたのに応えるように、右に寄って現棟に近づく(図5 ii)。この後、現棟は現長に話し

¹ 行番号で始まる行は発話、その後続く行番号のない行は身体動作を表す。「(0.1)」は無音区間の秒数、「(.)」は短い無音区間、[,]はそれぞれ重なり開始・終了位置、「言葉:」は音の引き伸ばし、「(言葉)」は聞き取りが確定できない発話を示す。また、#, +, *, !はそれぞれ前棟・現棟・現長・次長の動作の変化点、「-->」は同一動作の継続を示す。

- 01 前棟: #これでまた: (0. 1)+十四日から雪降ると(もう)かなり <図5 i>
 前棟: #現棟を見る----->
 現棟: +前棟を見る----->
- 02 (0. 4)
- 03 現棟: そう#ですね: ((頷きながら))
 現棟: ----->
 前棟: --->#視線を前方に戻す
- 04 +(1. 2)
 現棟: +視線を前方に戻す
- 05 現棟: +(あん玲) +(0. 3) (*あれ *見) *あすこの()ってゆう+()があるやろ <図5 ii>
 現棟: +右手で前方を指す+一歩下がって現長に体を寄せる----->+右手を右に移動
 現長: *現棟を見る*前方を見る*右に寄って現棟に近づく
- 06 (0. 3)
- 07 現棟: (でね) (0. 1) ()のや+まに(線があるやろ) (0. 5) +(左側に)
 現棟: ----->+右手のひらを下にして開く+右人差し指を突き出し左に移動
- 08 (1. 4)
- 09 現棟: [(あれ)]向こうは #もうあのレベルで
- 10 前棟: [#あ れ] ↑<図5 iii>
 前棟: #左手を前方に突き出す#現棟を見る----->
- 11 現長: (うん)
- 12 (0. 2)
- 13 前棟: #あのレベルで#ほんとは+こう低 #くしねえと: (0. 3) (#普通の人:) <図5 iv>
 前棟: #正面を見る->#左手を少し下げる#左手を上に戻す->#左手のひらを下にして開く
 現棟: +一歩前に出て前棟に並ぶ----->
- 14 前棟: *(0. 2) #かわいそうなんだよ #(.) [()てくん] であるんで
- 15 現長: [あ あ]
 前棟: #左手首を曲げ2度引き寄せる動き#体を現長に向ける->
 現長: *やや右に移動----->
- 16 # (0. 2)
 前棟: #体を左回りに回転させる
- 17 前棟: ああ <図5 v>

図4 事例2の転記

続け(07, 09行)、現長も「うん」と答える(11行)。ここでは、現棟が、前棟との会話の場から退却し、現長との会話場を新たに作るために、横並び2列の陣形を解体して新たな陣形を形成しているように見える(坂井田・伝, 2017)。

一方、現棟の09行目の発話と同時に、前棟は左手を前方に突き出しながら、「あれ」と発話し現棟を見る(10行)(図5 iii)。発話を中断した後、現棟と現長のやり取りの切れ目を待っている間、前棟は突き出した左手をそのまま維持している。この左手は中断した発話がすぐに再開されることを投射し、発話順番を取得する構えを表示している。前棟は正面に顔を戻して突き出した左手を維持しながら、現棟の発話(09行)の末尾部分「あのレベルで」を繰り返しつつ、「ほんとはこう低くしねえと:」と発話を再開する(13行)。自分に発話が向けられていることに気づくと(現棟がいつ視線を前棟に向けたのかはわからない)、現棟は一歩前に出て前棟に並ぶ(図5 iv)。前棟は発話を続けながら(13・14行)、一瞬体を現長にまで回して、「ああ」という現長の反応を引き出すと(15行)、体を正面に戻し、元の横並び配列を回復する(図5 v)。



i) F 陣形・横並び配列 (2 列)



ii) 後列に話しかける



iii) 前列から話しかけられる



iv) 前列に復帰



v) 横並び配列を回復

図5 事例2の陣形

- 01 前棟: #大日さんもまあ [玲 (0.3) 大先*輩#ちょっと [+動かしたから] な= (図7 i)
 前棟: #祠に顔を向けながら座る----->#左手で祠のほうを指す---->
 現棟: +肩を震わせて笑う
 現長: *前棟を見る----->
- 02 前棟: =(しの)# (.) 地震 # (.) 地震のせいにして#! [な] shi:
 03 現長: [!はい] ahahaha*ha ha ha*ha
 前棟: ----->#顔を上げる#現長を見る----->#下を向く
 現長: ----->*体を起こす*現棟を見る
 次長: !俯いて笑う
- 04 (0.1)! (0.4) + (0.2)* (0.3)
 現棟: +一步下がる
 現長: ----->*前棟を見る
 次長: !二歩下がって端寄りに立つ
- 05 前棟: #*な:
 前棟: #左手を雪面まで上げる
 現長: *頭をやや下げて覗き込む
- 06 (0.3)
 07 現棟: #はい ((3度頷きながら))
 前棟: #左手を水平に左に動かす
- 08 (0.1)#*!+ (0.3)
 前棟: ----->#左手を正面に戻す
 現棟: +前棟の前方遠くを見る----->
 現長: *前棟の左手の前の雪面を見る----->
 次長: !前棟の左手の前の雪面/前棟を見る
- 09 前棟: なこころ*へんでいいか+も#しんねえな:
 ↑ (図7 ii)
 前棟: #左手を少し上げる
 現棟: ----->+前棟を見る---->
 現長: ----->*前棟を見る----->
 次長: ----->
- 10 (0.1)*(0.1) + (0.1) ! (0.5) * (0.4) ! (1.0)*(0.1) + (0.2)# (0.5)
 ↑ (図7 iii)
 前棟: #下を向く
 現棟: ----->+前棟の前方遠くを見る----->+下を向く
 現長: ----->*前棟の前方遠くを見る*前棟を見る----->*雪面に両膝をつく
 次長: ----->!前棟の前方遠くを見る!前棟を見る----->
- ((4行省略))
- 15 # (2.3)
 前棟: #段差を上りだす
- 16 前棟: +(金*メダルとかも) (0.2) 金!メダル(もあ*さ +見に行く +企画) して:
 ↑ (図7 iv)
 現棟: +右足を一步前に出す----->+左方遠くを見る+左足を添える+頷きながら正面を向く
 現長: *下を向く----->*前棟を見る----->
 次長: !前棟を見る----->
- 17 (0.1)+*(0.2)
 現棟: ----->+現長を見る
 現長: ----->*前棟から視線を外す
 次長: ----->
- 18 現長: ah!ahaha
 現棟: ----->
 次長: ->!現長を見る
- 19 !*(1.1) ! (0.3) + (0.2)# (0.4) *(0.3) (図7 v)
 前棟: #現長を見る----->
 現棟: ----->+左方を見る----->
 現長: *立ち上がって一步前に出る----->*前棟を見る>
 次長: !体をやや内側に向ける!現長を見る----->!前棟を見る

図6 事例3の転記

現長の発話は、現棟が陣形を変更し会話場を形成したときや、前棟が体を向けたときに限られていることに注意しよう。このような陣形の一時の変更によって、側聞者から承認された受け手へと格上げされているように見える。

3.4 F 陣形・C 字型配列

事例3の転記と陣形の移り変わりをそれぞれ図6・7に示す。4人は道祖神場の最深部にある大日如来の祠の周辺にいる。祠の前の一部分だけ雪がかかれて、一段低くなっている。前棟はその部分で祠に顔を向けてしゃがんでいる。前棟は「大日さんもまあ玲(0.3)大先輩ちょっと動かしたからな」と冗談を言う(01行)(図7i)。発話を宛てられた現長は、前棟に視線を向け、さらに冗談を続ける前棟(02行)と視線が合うと、「はい」と答えた後、笑いだす(03行)。

その後の1秒間の休止の間に、身体位置の微妙な変化が生じる(04行)。次長と現棟がいずれも少し後ろに下がることによって、前棟の前方が大きく開けた状態になるのである。その瞬間、前棟は、座っている自分の目の高さにある雪面まで左手を上げ、「な:」と呼びかける(05行)。視線は向けられていないが、現棟はこの発話を自分に宛てられたものと解し、3度も頷きながら「はい」と答える(07行)。この前棟と現棟のやり取りは仕事モードへの移行の契機となる。前棟は「なこころへんでいいかもしんねえな:」と、事例2にもあった雪面の高さに関する話題を再び持ち出す(09行)。このとき、4人は前棟を頂点にして、左右に広がるような空間配置を取っている(図7ii)。前棟の前方に遠くまで広がる操作領域を侵犯しないような配置である。ただし、この時点で現長と次長の視線は、前棟や掲げられた左手の前の雪面に向けられており、操作領域の広がり気づいていないようである。

次の3秒間の休止の間には、視線方向の変化が生じる(10行)。前棟が09行目の発話の末尾で左手の位置を少し上げたのに反応し、現長と次長はその手の先の遠方に目をやる。現棟は少し前の時点ですでにその方向に視線を向けており(08行)、一瞬前棟を見るが(09行)、また同じ方向に視線を戻している(10行)、この瞬間、4人の視線方向が一致する(図7iii)。このとき、前棟の個人的な操作領域が4人に共有されるO空間になったと言ってよいかもしれない。

しばらくして、前棟は立ち上がり、段差を上がって、他の3人と同じ高さの雪面に進出してくる(15・16行)(図7iv)。前棟は「(金メダルとかも)(0.2)金メダ



i) 冗談を言う

ii) 仕事モード



iii) 視線方向が合う



iv) 同じ高さに上がる



v) F 陣形・C 字型配列

図7 事例3の陣形

ル(もあさ見に行く企画)して:」と再び冗談を言う(16行)。興味深いことに、現棟は右足を一步前に出し、体を少し外に開いた身体位置を取る。直後に左方遠くに目を向けていることから(16行)、前方に広がるO空間を意識した位置取りと考えられる。一方、途中で雪面に両膝をついていた現長(10行)は、前棟の冗談に対して笑いながら(18行)、立ち上がり、一步前に出る(19行)。さらに、次長は右足をやや前に出して、体を陣形の内側に向ける。これによって、前棟の前方に広がるO空間の部分に切れ目を入れたC字型の空間配置が完成する(図7v)。この後、会話は雑談へと移行する。

雑談中もこの陣形が維持される。事例1では、雑談中、現長・次長がF陣形の外側に控えていたのとは対照的である。この事例に見られるように、C字型配列は仕事モードから雑談モード、あるいは、その逆方向に容易に移行する陣形であり、両者の境界にあると言ってよい。それゆえ、もっぱら雑談になりやすい円形配列と比べて、立場が違うものも陣形の中に留まりやすいのかもしれない。いつなんどき仕事の話になるかわからない状況を考えると、側聞者の立場に自ら下りるような身体位置の変更は、むしろ差し控えるべきなのであろう。

- 01 前棟: で雪少ねえのもあん#だけど(.) #こういうふうになると: (図9 i)
前棟: #両手を胸元に置く#両手で舟形を描く
- 02 (0.2)#(0.7) (図9 ii)
前棟: #後ろに下がりながら3人と正対する
- 03 前棟: 後ろに(入れた)人にか*い#人の高さに +*段々 #!に
前棟: ----->#右手と左手で段差を作る#右手を下げ膝を曲げる
現棟: +頷く
現長: *左足をやや下げる*頷く
次長: !頷く
- 04 前棟: こう#いうふうになっ*てたの+が!: (図9 iii)
前棟: #伸び上がりながら右手を上げる
現棟: +頷く
現長: *頷く
次長: !頷く
- 05 前棟: (.) だけど:#(0.5)!確かに:*+その #いま御神体の: (図9 iv)
前棟: #左回りに回転し左手で斜め後方を指す#左手をやや動かす
現棟: +指差しの方向を見る----->
現長: *指差しの方向を見る----->
次長: !指差しの方向を見る----->
- 06 前棟: #(0.9) 長な#んの:(.)目 #の前行く*!と:
前棟: #左手を上下に1度動かす#左手のひらを下にして広げる#右回りに回転しながら元の向きに戻る
現棟: ----->
現長: ----->*頷く
次長: ----->!頷く
- 07 前棟: *!(0.3)#+社殿と同じ高 #さんなる
前棟: #両手を同じ高さで顔の前に置く#右手を前、左手を後ろにし、距離を作る
現棟: ----->+前棟を見る----->
現長: *前棟を見る----->
次長: !前棟を見る----->
- 08 # (0.4) (図9 v)
前棟: #両手を同じ高さに戻す

図8 事例4の転記

3.5 H陣形

事例4の転記と陣形の移り変わりをそれぞれ図8・9に示す。事例2と事例3の間で生じた場面であり、会話の場所は事例2と近い。前棟は、祭り会場全体の雪面の形状について、中央を低く、両サイドを高くしたほうがよいと説明している。近年、道祖神祭りは外国人の観光客が増え、背の低い日本人は後方からでは祭りが見にくい状況になっている。そこで、外国人が多く陣取る中央部分を両サイドより低くすれば、後方の日本人が見やすくなる、というのが理由である。事例2と同様な横並び配列を取っていた前棟は、「こういうふうになると:」と言って、両手で舟形を描く身振りをすることでこれを説明しようとする(01行)(図9 i)。

しかし、ここで前棟は発話を中断し、0.9秒の休止の間に、後ろに二、三步下がりながら体の向きを変え、他の3人と正対する位置に移動していく(02行)(図9 ii)。その後、右手と左手で段差を作る身振りを交えながら、「後ろに(入れた)人に外人の高さに段々にこういうふうになってたのが:」と新たな説明を開始する(03・04行)(図9 iii)。このとき、前棟は他の3



図9 事例4の陣形

人と正対して1人だけ突出した位置にあり、H陣形をなしている。これは説明という活動に志向した陣形と考えられる(牧野他, 2015)。

H陣形を形成する前後で、前棟の身振りの質が変化していることに注意しよう。H陣形を形成する前の身振りは「舟形」であり、これは受け手である3人の眼前に広がる雪面を模式化したものと考えられる。一方、H陣形を形成した後の身振りは「段差」であり、これは祭りの当日そこにいるであろう外国人と日本人の身長差を表象している。つまり、受け手にとって、その場で見えている何かと紐づいているわけではない。その意味では、H陣形において参照されるのは、現場にある対象物ではなく、特権的位置にある参与者自身(の身振り)である。

さて、説明を続ける中で前棟は、「そのいま御神体の:」と、左後方のはるか先にある御神体(祭りを見守る役割を持つ)を参照する(05行)。このときの前棟の身体位置の変化に注目しよう。前棟は左回りに60度ほど回転しながら、体を開いて、左手を御神体の方向に差し出す(図9iv)。前棟の顔は御神体の方向を向いているものの、身体は完全にはその方向を向いておらず、むしろ方向ベクトルと水平に位置している。そのため、身体に対して顔は正面ではなく、左に90度近く回旋している。これは、身体ねじり(Schegloff, 1998)に近い動きである。このような動きは、そこでの活動(=御神体を参照する)が副次的な関与(Goffman, 1963)であることを示している。この場においては、前棟から他の3人への説明という活動が主要な関与であり、それはH陣形によって支えられている。このことを証拠立てるように、前棟は「長男の:」と続けると、体を右回りに回転して3人と正対する向きに戻し(06行)、受け手と対峙したH陣形を回復して、再び身振りを交えた説明に入る(07・08行)(図9v)。

4. 議論

以上の事例で見てきたように、広大な野外における会話参与者たちの身体の空間配置は、物理的環境や相互行為的文脈に応じてさまざまに変容していく。以下、その形成・変容に関わる物理的・相互行為的・社会的要因を検討しよう。

4.1 陣形の物理的要因

陣形の形成・変容に関わる物理的要因として、i) 会話中で参照する対象物があるか否か、ii) もし



図10 近くの対象物を参照する円形配列

あれば、その対象物との距離はどれくらいかが大きく関わっている。

F陣形・円形配列(事例1)では、その場にある対象物を直接参照することはない。これに対して、横並び配列(事例2)やC字型配列(事例3)では遠くにある対象物を参照する。逆に言えば、遠くにある対象物を参照するのにふさわしい陣形が横並び配列やC字型配列だということである。ただし、対象物との距離によっては、円形配列のまま参照することもある。たとえば、図10では、前棟・現棟とともに円形配列を取っていた現長がその配列のまま、現棟のすぐそばに立っている杭を指差している。逆に、横並び配列やC字型配列で比較的近くの対象物を参照することもあるだろう。上記の特徴づけはあくまでも典型にすぎない。

一方、H陣形(事例4)では、特権的位置にある参与者の身振りを参照することが一義的であり、その場の対象物(とくに遠くにあるもの)を参照する際には、身体ねじりに近い動きを用いて一時的に身体位置を変更する。この身体位置の変更はあくまでも一時的なものであり、すぐに元のH陣形が回復される。すなわち、H陣形は、その場の対象物を参照し続けながら会話するのではなく、発話と身振りを中心に会話するのにふさわしい身体配置だと言えるだろう。

4.2 陣形の相互行為的要因

陣形の形成・変容に関わる相互行為的要因として、そこで行なわれる活動がどのような種類のものであるかという点が挙げられる。雑談では、多くの場合、F陣形・円形配列が取られる(事例1)。一方、H陣形は、1人の参与者から他の参与者への説明が行なわれる際に典型的に見られる(事例4)。F陣形の横並び配列やC字型配列は、その場の対象物を参照するための陣形であることから、作業に関わる事柄について助言したり、相談したりする場面で見られることが多い(事例2・3)。ただし、これらの配列のまま冗談などが発され

ることもある。とくに、C字型配列は円形配列に近い性質を持ち、そのまま雑談に移行することも多い（事例3）。C字型配列は、仕事モードと雑談モードをシームレスに行き来する柔軟な身体配置だと言える。

活動の種類に応じて陣形が形成・変容されると同時に、陣形によって相互行為上の振る舞いが制限されることもある。たとえば、H陣形の特権的位置以外の参加者はもっぱら受け手としての反応のみを産出する（事例4）。円形配列のF陣形から外れた位置（事例1）や横並び配列で後列（事例2）に立つ参加者は、主体的に発話順番を取ることはなく、側聞者の立場から限定的な反応をするのみである。これらの参加者が会話に参加するのは、主要な参加者から体を寄せられたり、向けられたりして、会話場に編入してもらったときに限られる。主要な参加者からのこのような働き掛けは、他の参加者を側聞者から承認された受け手へと格上げする手続きの一種と言えるだろう。

4.3 陣形変容の社会的要因

最後に、陣形の形成・変容に関わる社会的要因について検討しよう。主たる参加者4人のうち、前棟と現棟は新旧社殿棟梁として先輩・後輩の関係にある。一方、現長・次長にとって、現棟は現役の社殿棟梁として指導を受けているが、前棟とは直接つながりががない。現長・次長が円形配列のF陣形から外れた位置に立ったり（事例1）、横並び配列で後列に立ったり（事例2）することは、この4人の中の社会的関係性に基づいているように思われる。すなわち、参加者間の社会的関係性は、陣形の形成に少なからず影響する。

一方、前棟と現棟の間にも厳格な上下関係がある。この一連の場面は、前棟による視察という性格を帯びており、全体を通して前棟が助言や指示を与えたり、説明したりする場面が非常に多い（事例2~4）。しかし、現棟も現役の社殿棟梁という立場上、現長・次長に指示を与えることがある。図11は、前棟が現長・次長に雪面の整地について指示を与えている場面である。現棟だけが他の3人よりも突出した位置にあり、一見するとH陣形に似ている。しかし、H陣形とは異なり、現棟は3人と正対しておらず、活動の内容もH陣形に典型的な説明や語りではない。むしろ、F陣形・横並び配列で前列が1人のみから構成された特殊なケースと見たほうがいいかもしれない（図11では体をひねっているが、現棟の体は基本的に皆と同じ方向を向いている）。重要なのは、現棟が前棟とは異なる列にいるということである。この場面でも、前棟はい



図11 前方から指示する現棟

ろいろ発話しているが、それらは現長・次長に向けられたものであり、これまでの事例のように現棟に向けられたものではない。この身体の空間配置において、前棟から現棟に発話を宛てるのは難しい。現棟は、その空間配置の特性を利用して、自らも主体的に現長・次長に発話を投げかけているのである。ここでは、前棟より下の立場という社会的要因に抵抗する空間配置を取ることで、相互行為上の制約（中心的な立場に立っていない）を打ち破っていると言えるかもしれない。

謝辞 調査にご協力いただいている歴代の野澤組惣代・保存会・三夜講の方々に感謝します。本研究は、科研費基盤(B)「祭りの支度を通じた共同体〈心体知〉の集団学習メカニズムの解明」(2015~2017年度、代表：榎本美香、研究課題番号：15H02715)の補助を受けています。

参考文献

- 坊農 真弓・鈴木 紀子・片桐 恭弘 (2004). 多人数会話における参与構造分析—インタラクション行動から興味対象を抽出する—. 『認知科学』, **11** (3), 214-227.
- 榎本 美香・伝康晴 (2015). フィールドに出た言語行為論: 「指令」の事前条件達成における相互行為性・同時並行性・状況依存性. 『認知科学』, **22** (2), 254-267.
- Goffman, E. (1963). *Behavior in public places: Notes on the organization of gatherings*. New York: Free Press.
- Goffman, E. (1981). *Forms of talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Kendon, A. (1990). *Conducting interaction: Patterns of behavior in focused encounters*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 牧野 遼作・古山 宣洋・坊農 真弓 (2015). フィールドにおける語り分析のための身体の空間陣形: 科学コミュニケーターの展示物解説行動における立ち位置の分析. 『認知科学』, **22** (1), 53-68.
- McNeill, D. (2006). Gesture, gaze, and ground. In S. Renals & S. Bengio (Eds.), *Machine learning for multimodal interaction: Second International Workshop, MLMI 2005, Edinburgh, UK, July 11-13, 2005, Revised selected papers*, Vol. 3869 of *Lecture Notes in Computer Science*, 1-14. Berlin: Springer.
- 坂井田 瑠衣・伝康晴 (2017). 会話場の再編を司る身体配置・関与配分・成員性: 野沢温泉道祖神祭りの準備作業場面から. 『人工知能学会研究会資料』, **SIG-SLUD-B507**.
- Schegloff, E. A. (1998). Body torque. *Social Research*, **65** (3), 535-596.